キプリングの短篇小説に見られるインド像

——'Lispeth' および 'Beyond the Pale' を中心に——

芦　川　和　也

[キーワード：①帝国主義；②オリエンタリズム；③差異；④越境；⑤イギリス支配の曖昧さ]

序

ラドヤード・キプリング（Rudyard Kipling, 1865-1936）が幼少の頃からインドに対する造詣が深かったことは周知のことである。そして，ヴィクトリア女王のもと，帝国主義の風潮の強かった19世紀のイギリスではあるが，国内の大衆や作家たちの植民地インドに対する認識は曖昧で不正確なものが多く，彼には不満に思えた。以前のイギリス人にとっての東洋像はエリザベス・ギャスケル（Elizabeth Gaskell, 1810-65）やライダー・ハガード（Henry Rider Haggard, 1856-1925）のように，想像力や偏見に満ちていた。西洋人のディスコースにおけるオリエンタリズムが，深く浸透していたのである。

キプリングの *Kim* では，少年キム（Kim）が西洋人であるにも関わらず，英語よりヒンドゥー語を上手に話し，インド人に変装して人種・階級・宗教の壁を楽々と乗り越えている。つまり白人でありながら自ら《周

縁》へ移行しているのである。アブドゥル・ジャンモハメド（Abdul R. JanMohamed）の指摘するように，E・M・フォースター（E. M. Forster, 1879-1970）の *A Passage to India* に比べて，*Kim* では人種間の差異が積極的に認められている[1]。その差異を認めた上で，キプリングは，キムの異文化の障壁を乗り越えさせ，融合の可能性を探求しているのである。けれども，このような見解に立てば，*Kim* はキプリングの帝国主義的傾向を代表するものではなく，むしろ例外的な作品となる。そこで，実際に *Kim* 以外の作品を検討して，彼の異文化，特にインド理解に対する姿勢をより深く洞察する手がかりとしたい。今回は 'Lispeth' と 'Beyond the Pale' を主に取り上げた。いずれもイギリスとインド間の障壁や越境に関する彼の考えがよく投影されている短篇である。

I

まずは 'Lispeth' について考察する。ある高地地方の娘は教会で「エリザベス」という洗礼名を授けられるが，高地のパハーリ語では「リスペス」と発音された。両親を失ったリスペス（Lispeth）は，現地の宣教師夫妻のもとに引き取られるが，彼女の存在は，美しく成長するにつれて微妙なものとなっていく。インド人とは異質な風貌をリスペスが身につけていることからも，クリスティアニティの影響は明らかである。しかし，完全に白人になったわけではない。彼女のクリスティアニティはイギリスから与えられたものであり，自らの意思で西洋に足を踏み入れたわけではないのである。やがて，リスペスは自ら助けたイギリス人男性を一方的に愛し，宣教師夫妻の反対にも関わらず，結婚しようとする。彼女が，自ら西洋の領分に入り込もうとしたのである。これが，リスペスが完全にボーダーを越

えた瞬間といえる。

これに対して，夫人は男に嘘をついて帰国するように勧め，彼もその通りにする。それまで「保護者」であったはずの夫人が「東洋人を抑圧する西洋人」になっているのである。オリエントが支配から抜けだそうとするのは「間違った」行為であり，イギリスの力を持って回避しなければならないのである。逆にキプリングは，「他者」がいざ越境をする段になると拒否するという，西洋支配の曖昧さを描出しているとも言える。

やがてリスペスは事実が明かされると，夫人のもとを去り，ぼろをまとい，髪を汚く縛って高地地方の彼女「本来の」格好で再び現れ，以下のような別れの言葉を口にする。

> 'I am going back to my own people,' said she. 'You have killed Lispeth. There is only left old Jadéh's daughter——the daughter of a *Pahari* and the servant of *Tarka Devi*. You are all liars, you English.'[2] (*LI*, 19)

逆に夫人も，心の内では常にリスペスは異教徒だと思っていたと別離を宣言している。キプリングがこの夫人の発言を必ずしも肯定的に扱っていないことは注目に値する。キプリング自身が西洋人と同化することなく，両者を見つめていることが感じとれるのである。これは，短篇 'The Mark of the Beast' の拷問の場面の記述にも窺える。

結局リスペスは東洋人の娘に戻り，「彼女自身の人々」，すなわちオリエントの世界に帰った。彼女が死んだときは皺だらけの老婆の姿となっており，かつて美しいリスペスの面影は全くなくなっていた。キプリングは西洋の加護の消えた彼女から，その影響力をはぎ取ったのである。

リスペスはキリスト教に仕えた結果，白人を愛するようになり，しかもその白人の手によって愛を捨てさせられたのである。洗礼を受けようとも，ダイアナのように美しくなろうとも，そして真剣に恋しようとも，彼女はイギリスの文化の中で自己表現することは阻まれているのである。キプリングは冒頭に転向者の詩を用いているが，単に西洋／東洋の分離の為だけに用いたのではない。詩がリスペスの気持ちを代弁しているようで，作品全体にペーソスが伴う効果を発揮している。それゆえこの作品を実際に読んだときに，読者は東洋にばかり否を感じるようにはならない。

また，宣教師夫人＝キプリングでもない。キプリングは夫人の言葉にはアイロニカルに言及しても，リスペスに同様の態度をとってはいない。読者が感じる，リスペスに対する漠然とした哀感やイギリス支配の曖昧さこそ，作家の戦略なのかも知れない。

実は，リスペスは *Kim* においてシャムレグの女として再登場している。そして，イギリス人たちは皆嘘つきだ，という印象的な台詞が繰り返されているのである。

> 'Thy Gods are lies ; thy works are lies ; thy words are lies. There are no Gods under all the Heavens……'[3)]

彼女にとって神は個人の心の内の存在であって，白人に育てられていたときの神は宣教師夫人であり，愛した男であった。だから，彼らに嘘をつかれたリスペスは，神に裏切られたと思うのであり，白人の神はみんな嘘だらけとなるのである。だが，このようなリスペスが，東西の越境をするキムを助けている。キプリングは融合の可能性をキムに託させているのかもしれない。（無論，子供の世界での成功であるという批判もある。）

II

次は 'Beyond the pale' について分析するが，この短篇はゴシック的な色彩が強い。帝国主義的傾向があり，かつオカルト色の強いものを，パトリック・ブラントリンガー（Patrick Brantlinger）は「インペリアル・ゴシック」とよんでいる[4]。そして彼は，帝国主義作家たちは東洋の未知なる精神世界やオカルト的なものに対して，反射的に敵対するのではなくて，むしろ魅力を感じ，さらにそういったオリエントの神秘性を自分のインペリアリズムを補強するものとして利用するのだ，と指摘している。

'Beyond the Pale' の主人公はアングロ・インディアンのトレジャゴ（Trejago）という男である。とある横丁の突き当たりの「盲壁」には格子窓が一つついており，若い寡婦ビセサ（Bisesa）が住んでいた。トレジャゴがその格子窓を通してビセサの存在を知ると，お互いに惹かれ合う。ここで，ビセサの家の格子窓はイギリスとインドの接点を暗示していると考えられる。眺めるだけであったイギリスが，格子が外されて東洋世界に入り込んできた。そしてビセサも受け入れている。まさに両者が「領分を越えた」のである。彼が夜に忍んでいく姿が次のように描かれている。

> At night, when all the City was still, came the walk under the evil-smelling *booka*……the quick turn into Amir Nath's Gully between the sleeping cattle and the dead walls……(*BP*, 49)

「悪の匂いのする衣」というように，「領分を越えた」後ろめたさが窺える。やがて両者の認識の間に軋轢が生じると，ビセサはトレジャゴを自分

の魂以上に愛していたこと，そして愛し合ったのが間違いであったとして彼に別れを告げている。

トレジャゴが数週間後，横丁を訪れると，彼女の姿は変わり果てていた。

> From the black dark Bisesa held out her arms into the moonlight. Both hands had been cut off at the wrists……Then, as Bisesa bowed her head between her arms and sobbed, some one in the room grunted like a wild beast……(*BP*, 51)

ビセサの衝撃的な姿は，彼女の「領分を越えた」ことに対する代償を表している。そしてその代償は男側にも求められている。刺されたトレジャゴは衣を脱いでいるが，これは例の「悪の衣」を脱ぎ捨てているのであり，自分の領分に戻った瞬間と考えられる。そして結局「盲壁」の格子窓は塗りこめられており，普遍的な交流ではなかったものの唯一の窓が失われたのである。

冒頭のヒンドゥーの諺にも暗示されるように，今回越境を侵すのはトレジャゴとビセサ，つまり西洋・東洋の双方からであった。だから，ビセサほどではないが，男にも悲劇がおきている。西洋人もむやみに東洋に入り込むことはできないと警告しているのである。

また，'Lispeth' と同様なこともおきている。ビセサはトレジャゴの姓である「クリストファー」が発音できないおり，イギリス・インド間に厳然と存在する差異を再び感じさせているのである。*Orientalism* でエドワード・サイード（Edward Said）が述べているように，インド人とイギリス人との間に根本的な差異が存在することは否定できない[5]。その差異に優劣を組み込んでいくことが西洋人のオリエンタリズムとなる。そしてキ

プリングは差異を強調することに主眼をおいていたようである。彼は結果的に，彼以前の「オリエンタリズム」に疑問を投げかけることになる。インドの神秘性・異質性を浮き上がらせ，本国の民衆に伝えたいと考えたのであろう。異文化理解という意味では依然として未熟で不完全な立場であるが，植民地文化に関する現状把握に着眼をおいたことは評価に値する。短篇 'Lispeth' 同様，ここにもキプリングの戦略を見出すとすれば，交流の軋轢あるいは短絡的な「過ち」に先に気づいて，西洋を遠ざけたビセサの方により大きな代償を求めたことであろう。これを直接的に抑圧とだけ捉えるのではなく，東洋に対する読者の着目を集める効果が意図されていると考えられるのである。

III

以上の短篇小説は，いずれも異文化の衝突・越境・融合を扱っている。そしてキプリングはいろいろな方向性を持ってこれらを扱っており，その問題の存在を提示しようとする積極的な姿勢が窺える。だから *Kim* も融合の可能性の一例を示しているにすぎず，絶対的なものでも，例外的なものでもないのである。短篇の結果はいずれも，越境に成功しているとはいえないが，我々は越境そのものの否定とだけ読むべきではない。つまりキプリングは異文化融合の可能性までも否定するのではなく，文化的にインド文化をイギリス文化が凌駕することはできないし，深く理解しなければ却って両者の不幸を招くと主張しているのである。その両者の間の厳然たるボーダーの存在と現状をテキストに的確に組み入れたこと自体に我々は注目してもよいだろう。同じ「インペリアル・ゴシック」でも，幾重にも抑圧の感じられるハガードらとは種を異にしているようである。ニロッ

ド・チョウドリー（Nirad C. Chaudhuri）も *Kim* を，西洋人がインドを描いたものの中で，最も優れた本であると評している[6]。

インドを本当に理解しているという自負から，キプリングには本当のインドは自分が伝えねばという義務感が感じられる。むろん，西洋人らしいオリエンタリズムからキプリングとて分離することはできていない。インドに対する植民地支配という立場には反対していないことや，彼の作品の当時の人々に与えた影響の大きさから見てもそれに対する責任は免れられない。しかしながら，キプリングはその曖昧さを感じとり，何かしらの疑問の影を作品に込めていることも確かなのである。これは 'The Mark of the Beast' で，キプリングが武力的な解決方法を必ずしも是としていないことからも指摘できる。またさらに，その伝え方は彼なりの理想に基づくものであった。そして彼の活躍し出した時期は，大英帝国の斜陽の時代への過渡期であり，必ずしも彼の理想が政府の政策と合致してはいなかったことにも注意が必要である。

キプリングはインドの理解できないものに対する警告や，イギリス人の理性的な顔の裏に隠れた野蛮ぶりを示しながら，最後には両国の間に何事もなかった状態に戻していずれの短篇も結んでいる。このような結末に，当時のイギリスの政策に対する物足りなさと別のインド支配の方法を模索しようという彼の意図を抽出できる。だからむしろ，キプリングの作品に，フォースターらによって受け継がれる，異文化の橋渡しを探ろうとする大きな流れの萌芽を見い出せるのである。ジョン・マックルーアー（John McClure）も，ジョゼフ・コンラッド（Joseph Conrad, 1857-1924）よりこの傾向が強いと指摘している[7]。

インドに大きな愛着を感じていたキプリングは，イギリスの力でそこを「良い方向」に導かせたかった。そして帝国主義下の世相では，両国の安定

を保つためには，植民地という形しか取れなかったのである。サイードも，当時のアングロ・インディアンたちがフォースターのような考えなら，何もなしえない上に，一週間と持たないこと，そして下品で浅はかであってもキプリング作品からは英領インドを窺い知れると指摘している[8]。

キプリングのインドに対する帝国主義的な姿勢は，不本意ながらというよりも，その中でどうすればよいかという方向性であった。ジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903-50）はキプリングのインペリアリズムを「一種の強制的な伝道活動」と評している。

> …… [H]e had never had any grasp of the economic forces underlying imperial expansion. It is notable that Kipling does not seem to realise, any more than the average soldier or colonial administrator, that an empire is primarily a money-making concern. Imperialism as he sees it is a sort of forcible evangelising.[9]

「経済的なことに目を向けない」キプリングの伝道活動には，ある種の理想主義すら感じられるのである。

そして，このように帝国主義思想下でしか模索できなかったところにキプリングの限界もある。彼がアメリカからイギリスに戻ったときの，国民の帝国主義に対する無関心さや，第一次大戦後にイギリスが勝者側に立ったにも関わらず，その世界的地位が下落してしまったことに政治的な失望をおぼえた。コンスタンティン・フィップス（Constantine Phipps）が以下のように述べている。

> And most people in England were simply ignorant of the Empire. It

must have astonished Kipling coming from an India where England was the very symbol and fountainhead of authority, order and justice.

彼のインペリアリズムは，むしろパターナリズムというべきであり，これは彼の描くイギリス人に父親像を見出したデヴィット・トロッター（David Trotter）の指摘に対応する[11]。

結

結果的に，キプリングはいわば大英帝国の吹き溜まりに目を向けつつ，ストーリー・テラーとしての役割を果たした。彼は当時の人々にインドの実態を知らしめ，両国の橋渡しのきっかけになったとはいえよう。それは未熟なものであり，現代の観点から見れば，多分に抑圧の面の方が目に付くかも知れない。けれども，ピエール・マカリー（Pierre Macherey）が論じたように，テキストは突然変異的なものではなく，その背後にある社会的・歴史的背景をもとに組み合わされたものである[12]。だから，キプリングが歴史の扇動者なのではなく，彼自身もその流れの中の一分子だと見た方がよい。そして彼の作品の中から，我々も当時のインド像の捉え方の移り変わりを読みとれるのである。

オーウェルが，キプリングの立場ついて述べている。

He identified himself with the ruling power and not with the opposition. In a gifted writer this seems to us strange and even disgusting, but it did have the advantage of giving kipling a certain

grip on reality.[13)]

キプリングの多数派としての立場は，サイードの「知識人」[14)]とは対極のものであるが，逆に的確に世相を把握しており，我々に伝えてくれているのである。そしてその重要性まで我々は彼の作品から奪い取るべきではない。「許しがたいと思えるところがたくさんあるだろうが，同時に真実もたくさん含まれていて，どうしても無視するわけにはいかない」というサルマン・ラシュディ（Salman Rushdi）の，キプリングについての言葉を引いてこの分析の結びとする[15)]。

注

1) Abdul R. JanMohamed, 'The Economy of Manichean Allegory : The Function of Racial Difference in Colonialist Literature.' *Critical Inquiry* 12 (1), 1985.
2) テキストは，Rudyard Kipling, *Selected Stories*. (New York : Penguin, 1987) を使用した。以下の引用は，'Lispeth' を *LI*, 'Beyond the Pale' を *BP* とする。
3) Rudyard Kipling, *Kim*. (New York : Penguin, 1989) p. 313.
4) Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness*. (New York : Cornell University Press, 1988)
5) Edward W. Said, *Orientalism*. (New York : George Borchardt Inc, 1978)
6) Nirad C. Chaudhuri, *Hinduism : A Religion to Live by*. (London : Chatto & Windus Ltd, 1979)
7) Patrick Williams, '*Kim* and Orientalism.' *Colonial Discourse and Post Colonial Theory*. (Hertfordshire : Harvester Wheatsheaf, 1993)
8) Said, *Orientalism*.
9) George Orwell, 'Rudyard Kipling.' *A Collection of Essays*. (New York : Doubleday & Company, 1954) p. 126.
10) Phipps, Constantine. 'Introduction.' *The Day's Work*. (London : Penguin Classics, 1988)

11) David Trotter, *The English Novel in History*. (London : Routledge, 1993)
12) Pierre Macherey, *A Theory of Literary Production*. (London, 1978)
13) Orwell, 'Rudyard Kipling.' p. 138.
14) Edward W. Said, *Representations of the Intellectual*. (London : Vintage, 1994)
15) Salman Rushdi, *Imaginary Homelands : essays and criticism*. (London : Granta, 1991)

Rudyard Kipling (1865-1936) had a profound knowledge of Brithsh India. So he could not help being treated as a standardbearer of imperialim because of his epigram that influenced people in those days. Certainly his works have aspects of suppressing the Orient, but at the same time he gropes about the way of bridging the gap between Britain and India. Kipling's imperialism is not the same as the earlier writers'.

In 'Lispeth,' Kipling describes an Indian woman with pathos, who is deceived and made a fool by the Occidental. He would bring out the vagueness of the rule of Britain in the story. In 'Beyond the Pale,' the dead-wall represents the border between the Orient and the Occident. An Anglo-Indian and an Indian widow would cross the border together and they paid a high price for their border violation.

These two short stories take up the question about crossing the border and reflects the way Kipling thinks about it. He emphasises differences between the two countries, and suggests that people should not invade it carelessly if they do not have enough understanding. He, moreover, does not deny the structure that Britain colonises India itsalf.

However, Kipling actually repeats trial and error to lead the relationship between Britain and India to a 'good' direction in social conditions of the age. (It of course has a lot of dissatisfaction from the point of the present view.) We should appreciate Kipling's talent as a storyteller and could recognise the situation of the two countries from his works.

(学習院大学大学院人文科学研究科イギリス文学専攻博士後期課程)